

『資本論』の周辺

相澤 秀一

『資本論』第一巻・初版の発行は一八六七年の秋であるから、今年はちょうど百年目にあたる。発刊当時、意識的な黙殺戦術によって、殆んど普及をみる事ができなかった本書は、その後百年目のこんにち、世界各国民によって広く読まれている。殊に日本においては著しい。「今さらマルクスでもあるまい」、という言葉は『資本論』がますます広く読まれ、その思想が普及していることの反語以外の何者でもない。たんにそれが学界・思想界において大きな影響力をもっているのみならず、現実の歴史世界においては、此の書物の原理に導かれて、いくつもの社会主義国家の成立をみるに至っている。世界人口の三二％は社会主義の生活を営むようになってい。かつて地球は一九世紀一ぱいを費やして資本主義によって征覇されたが、その満月状態も二〇世紀に入るや、その一〇年代に早くも欠けはじめ、第二次世界大戦後においてその欠落度はますます拡大された。そして此らの国においては、「マルクス主義はもう時代おくれた」、などという言葉をかかない。それどころか、『資本論』は社会主義経済建設の過程において、理論的に大きな役割をはたしている。それは周知の如く、『資本論』は資本主義社会の経済的土台を分析の対象としたものであるが、その分析方法は巾広い歴史的視野に立って、深くつっこんだ究明を行なっているからである。人類が後代に与えた文化遺産のなかでも『資本論』は最大なものの一つ

であろう。『資本論』は古くさくなくなったどころか、ますますその偉大な光を輝やかせているということは否定しえぬ現実である。

日本で『資本論』の邦訳あるいは解説書、紹介がみられるようになったのは、第一次大戦以後の時期である。日本のマルクス経済学界に大きな足跡を残した河上肇は、『マルクスの資本論』を大正九（一九一八）年に執筆している。邦訳の最初のもものは、一九一五年の松浦要による第一巻・第一篇―第三篇、までのものである。次いで同年一二月、生田長江によって第一巻第二篇までの訳本が出るが、完訳は高島素之による一九二〇年刊（大鉢閣および而立社）版のものである。その後一九二五年に改訳本が新潮社より、改訳完本が一九二七年に改造社から出る。そして現在、四種類の邦訳本が出され、その発行部数もすばらしいときく。ひとり訳本の発行部数が大きいのみならず、日本のマルクス経済学研究の水準も高い。恰も『資本論』発刊百年の記念に因んで、『資本論』についての二、三の問題を提起して私見を開陳せんとするのが、この小論の意図するところである。

一 経済の世界

経済学の対象について『経済学批判』の「序説」は、「当面の対象は差し当り物質的生産である。社会において生産しつつある諸個人―従って諸個人の社会的に規定された生産が当然に出発点である」（全集・⑩・六一五頁）と述べている。社会的に規定された生産とは一定の社会の発展段階における生産のことであって、マルクスの場合は近代ブルジョアの生産である。ここに物質的生産というのは、極限的には衣・食・住にかかわる生活資料としての財貨ならびにそれらの生産に必要な生産財であって、いわゆる社会の富である。だから『資本論』はその

冒頭の文章において、商品の老大な集合として現象している富を研究の出発点におくことを示している。富の社会的生産・再生産過程が経済の基本性格である。もちろん此の場合、一方においては分配、交換、消費、の生活領域が生産に包摂されるものであることを前提するとともに他方、生産という場合その技術過程に重点があるのではなく、生産における人間関係、いうところの生産関係に重点があることを前提している。従って経済の世界とは物質的生活諸関係の総和とか或いは生産諸関係の総和と呼びかえてもよく、広汎な人間の社会生活領域―その総和が全社会構成体となるのであるが―の土台たる生活領域である。此のものを対象として取り上げ究明して行くところに経済学が成立する。

ところで経済学は実在認識の科学であり、経験科学であり、説明科学である。実在科学とは実在として生起する事象を因果関係において説明することをその主要な特色とする。因果関係における解明とは恰も自然的事象にたいする認識と同様に、没意味的な事象として追究することであつて、そのかぎり学問的性格は自然科学と全く同一である。若しもかような結論を許すならば、経済という社会的実在はその性格において自然的実在と同様でなければならないことになる。かような主張は如何にして成立しうるか。

しばしば引き合いに出される『資本論』第一巻・第一版への序言における「経済的な社会構造の発展を一の自然的過程と解する」という文言であるが、これについて一般に唯物史観というマルクスの歴史観をもってきて、人間社会発展の合法則性ということで理解しようとする。私も一般的にはこの解釈を否定しようとはしない。唯物史観がマルクスの経済学研究を指導的に貫く赤い一本の線であることは周知の通りであつて、此の史観に立つてブルジョア社会の経済的土台を弁証法的に解明することがなされたのであり、同時にまたこの史観は古典派経

経済学の批判的継承における彼の経済学体系の樹立とともに得られたものである。「マルクスとエンゲルスは、そのほかのあらゆる社会関係から生産関係を取り出すことによって、一つの経済的社会構成体の概念でいろいろの国的社会的な発展における一般的な特徴を見つけ出し、いろいろの国の支配的な経済関係を普遍化することができた。生産力の水準によって決まる生産関係は客観的な性格をもっているから、経済的社会構成体の発展を自然史的な、つまり厳密に合法的な過程とみなすことができた」(フイコッキー・『資本論の生誕』・一〇頁)。生産力を起動力としてのその発展にともなうそれと生産関係との矛盾をとおしての経済的社会構成体の発展変化を基底においての全社会構成体の变化発展は、具体的には生産力を担う階級と既存の生産関係を保持せんとする階級との斗争拮抗となつて社会変革をもたらす。これが唯物史観の命題である。生産力と生産関係の矛盾は経済の次元におけるもろもろの経済諸形態として発現するが、さらにそれは階級闘争を踏んまえて政治の次元における事象の生起を必然する。経済学がその対象を生産関係 \parallel 人間関係 \parallel 階級関係として捉えた経済の世界とするかぎり、政治過程の考察が斯学に入りこむことは当然である。⁽²⁾然し経済学は主要な視点を、一応上部構造から抽象された純経済過程においている。もちろん経済過程は上部構造たる国家によって綜括されていることは言うまでもないが、マルクスの経済学体系は一応国家を抽象して純粹に経済過程を、かんたんな抽象的な範疇から徐々に複雑な具体的範疇に上向させて、理念的に描かれた資本主義の全体的把握を行なっている。そしてその上に、国家、さらには諸国家の経済的相互関係の考察にうつる計画を立てている。こうみてくるならば、方法としての唯物史観をその基礎において、経済学は一義的にはもっぱら純経済過程を取り扱い、諸経済形態の考察に重点をおく。かくの如く取り上げた経済過程が自然史的過程であるということは、唯物史観にいわゆる社会の歴史過程が自然史

的過程であるとは別異の意味をもっている。

大塚久雄教授がその著『社会科学の方法』でこの問題にこたえ、ブルジョア社会の特殊性を自然成長的分業を基軸としての社会全体の物質新陳代謝の過程が疎外されていわば第二の自然となった事実のうちに見ようとされる。いちおうはその限りにおいて正しいと思うが、さらに論をすすめて、マルクスがこの第二の自然における行為主体は経済学的範疇の人格化にすぎない外的—経済的な「階級」状況のもとにおける主体と考えたのは一面的であって、内的—人間的な利害状況のもとにおける・いわば「身分」的状況下の主体を看のがしてはならない、としてウェーバーの所説に積極的な意味をもたせようとされるが、これは唯物史観の曲解にもとづくものである。その点、見田批判（見田石介・「資本論」の立場と方法」・『経済』・五月臨時号）は正しいが、見田教授もまた自然史的過程の意味をもつばら唯物史観の見地から汲み取っていられる。だから勢い水掛け論になってしまう。兩者の考察の次元はことなっているから。

ブルジョア社会の成立と共に経済学は科学としての市民権を獲得したのであるが、このことはブルジョア社会の経済的土台の客観過程が自然史的過程として展開されているからに他ならない。その根柢は全面的な商品経済であるということにある。いわば商品の論理において独自に展開する運動体であるということであって、この論理を展開させる法則が価値法則であり、自然法則と同一の性格のものたる点において基礎法則である。物質的新陳代謝の過程は、何らの外圧によることなく機構の具有する基礎法則にもとづいて行なわれる。封建制経済は、常に経済外的強制として知られる外圧によって右の過程が維持された。ここに商品経済の特色がある。自然経済の名に値いする社会はブルジョア社会を置いて他にない。社会主義社会は意志経済である。もちろん、資本主義

は資本の論理によって展開されるが、それが商品経済に基礎をおくかぎり、資本もまた商品として、資本の論理は商品の論理によって補完される。此のような考え方は修正主義に通じ宇野理論に屈伏するものと難ぜられるかも知れないが、資本主義商品生産の社会を、かかる意味においての自然的過程として捉えた宇野理論は、右の点に関するかぎりでは肯定されうる。「しかし、この考え方はあやまっている。この考え方にしたがうと、資本制生産様式以外の生産様式には客観的な法則はなく、それらは自然的過程ではなくなることになるが、たとえば社会的総生産は、それぞれの量的に規定された社会的総欲望の各部門に照応して国民にふりあてられねばならぬというような経済の法則は、それぞれの場合がちがった形態がとられるにしても、どの生産様式にもひとしくあてはまる法則であつて、この法則にしたがうことなしには、社会は発展することも、存続することもさへ長くは許されない」(見田論文・二五九頁)、との見田教授の主張には別段異議はない。ここにいう法則は文字通り自然原則であり、人類が彼らの社会的物質代謝過程をつづけて行かんとするかぎり、絶対的に従わねばならぬ原則であることは、マルクスのクーゲルマン宛の書簡(一八六八年七月十一日付)に語られていることである。こういうばかり経済生活の領域のみではなく、あらゆる人間の生活領域はつねに法則に従って発展してきたものである点において自然的過程である。第二次産業革命といわれる現時点の生産力の増大、技術革新、原子エネルギーの発明、ことごとくは自然科学に依拠し、自然の具有する法則に従って人類が行なってきたものである。人間社会の発展もまた一つの自然史であつて、それが特殊的には生産力と生産関係の矛盾を通して展開される経済的社会構成体の変化・交替が唯物史観の次元における自然的過程である。いまここで問題になっているのは、社会的物質代謝の過程を貫く自然原則(あるいは経済原則と呼んでもよからう)にどのように従っているか、その従い方

によつて自然経済および意志経済という様相の特殊性を見出し、それを根拠に経済過程の自然史的過程であるかどうかを見ようというのが私見である。原則の命ずるところを人間が意識して対処して行くところに意志経済が成立し、原則の一方的作用に盲目的に人間が従わざるを得ぬところに自然経済が成立する。そしてこのことは、原則の現象形式としての法則を人間が認識し意識しているか否かの問題ではなく、体制が法則を利用しえさせるか否かにかかわることであり、正に商品生産経済は、かかる法則の貫徹をただ受動的に受けうるのみである。それ故に経済の客観過程は、国家の権力を以てしても如何ともしえざる第二の自然として人間に対立するのである。ここに自然的過程と言われる所以がある。要するに商品の論理によつて展開される経済の客観過程、すなわち市場メカニズムによつて展開される経済の客観過程は全くの自然的過程であつて、ブルジョア社会にのみ特有なものである。この場合、国家による経済政策行為は、人間に盲目的服従を強いる資本主義商品市場経済メカニズムに対する人間の抵抗に他ならないのであつて、恰もそれは自然にたいする場合と同様である。茲にブルジョア経済政策の限界がある。人間は経済の中に埋没されて、経済が主体で人間が客体であるところに資本主義商品経済の特色がある。社会主義社会においてのみ人間は主人公となり、経済を手段として人間はその社会的福祉を語りうるであろう。このとき経済学はその性格を計画経済学にかえる。

ヴァルガはその著『資本主義経済学の諸問題』において『資本論』や『批判序説』から、すべての生産様式に共通する一般的法則を引きだして整理している。(1) 人間生活の必要条件としての労働、(2) 労働生産物はつねに使用対象である、(3) 分業の法則、(4) 生活手段元本は常に労働者によつて生産される、(5) 生産指揮の必要、(6) 消費手段の生産に比較して生産手段の生産がより急速に増大するという法則、(7) 消費は長期間にわたつて生

産を上まわることとは決してできない、というのがそれであるが(同書・一七―八頁)、これは当然のことであつて如何なる様式の社会的生産もこれらの法則に従わねばならない。だからといってその過程が特に自然的過程であるとは考えられない。経済的社会構造の発展過程が自然的過程であるという主張は、一つには唯物史観の次元において把まえた人間社会の発展過程を意味すると同時に、資本主義商品経済体制が自然的過程であることを意味すると解すべきである。かくしてのみ資本主義分析の経済学が實在科学たりえたのである。

(1) 實在科学というのは客観的實在を對象として成立する科学である。實在としての事實を自然的事実と生活事実とに分け、後者を取り上げる學問は一般に社会科学であり、その性格は自然科学の如く單なる認識科学ではありえず、了解科学でなければならないという所論も存在する。此の点に關し、かつて私は、『経済学基礎理論』において批判したことがある。そこで大凡そ次ぎのようになつた。因みにかかると所論は宮田喜代蔵教授の『経済原論』にみられる。同書において教授は、自然科学の對象界は没意味的な事実すなわち与えられてあるもの(所与件)であるにたいして生活科学の對象界は經驗された意味的事実すなわち為されてあるもの(所作件)であるとされ、前述のような主張をされる。私が没意味的な事実として経済事實を取扱うという意味は、市民社会を構成する個々の人間は意志し意欲し行爲する主体として何らかの意味をもつた生活を営みつつあるにもかかわらず、彼らの生活行爲を介してつくりだされた客観過程は、個々人の意志や意図とは無關係に展開されたものであるかぎりにおいて、没意味的な事実世界であると看做すべきである。と云うにある。

(2) 唯物史観の命題を確認するかぎりにおいては、階級關係を無視しての経済学的研究は成り立たない。殊に社会的生産力の担当者たる直接的生産者階級が、特定の生産様式での生産力の発展において、いかなる作用と影響を受け、それにたいしてどのような反作用を行なうか、かくして経済的社会構造がどんな變革を蒙らざるをえないか、の究明こそが経済学の課題の主要なものである。『資本論』の「資本制蓄積の一般法則」は此の間の事情を明瞭に物語っている。まさに資本制蓄積の敵対的性格こそ、階級矛盾を激化させ、階級闘争を通つて、古い社会の變革と新しい社会の形成とがつくられるのである。社会の發展・變革は、政治權力を掙象しては論じえない。資本の再生産過程は同時に生産關係⇐階級關係の再生産過程である。殊にはまた、現代の國家独占資本主義の経済学的考察には、國家を不問に付することはできない。

二 勞 働

人間の生活は自然的環境のなかで自然に働きかけて生きて行くという形態をとるが、これがいわゆる人間の物質代謝過程であって、自然必然事である。物質代謝の過程は、一方においては生産過程であると共に他方においては消費過程である。然しその基本的なものは生産過程であるのみならず、消費過程もまた、たとえ衣・食・住の純消費過程であっても、それが生産過程を遂行させるに必要な労働力を健全な形において再生産する過程であるという意味では生産過程である。生産過程は取りもなおさず労働過程であり、経済の根本である。

『資本論』は第一巻・第三篇・第五章の第一節において極めて抽象的に超歴史的な物質代謝過程としての労働過程を取扱い、ついで資本制商品生産のもとでの労働過程を価値増殖過程としてその特殊化された形態について考察を行ない、第四篇・「相対的剰余価値の生産」でより具体化された形態での剰余価値生産の過程を究明している。このところがいわば労働疎外の内容・実体についての叙述である。かように、資本主義生産様式によって歪められた労働過程が本来の姿を取戻し、労働の権威が実証される自然史的過程が、第七篇の第二十三章およびなかんずく第二十四章・第七節において論究され、進んで第三巻・第七篇・第四十八章のなかで、いわゆる「自由の王国」として知られる箇処で結語が与えられている。

古典学派たとえばJ・S・ミルに見られる如く、労働が苦痛なりや快楽なりやという設問が試みられた。もちろんこんにち、多くの大衆は職場において労働の苦痛を感じ、日曜大工の労働に快楽を感じていることは事実である。然しかような資本主義的な労働疎外の実体から人間が解放されたとき、労働の苦痛もまた解放されるだら

うか、という問題提起は一理あるが如くであるが当を得たものではない。よしんばさような事態が付随的に生起するものとしても、それはマルクス経済学に立つ労働本質観ではない。もちろんかく言えばとて物質的生産活動自体が、外圧・強制もなく専ら自主的に行われるものであるとしても、それが何ほどの肉体的苦痛を人間にもたらすであろうことを否むものではない。さればこそ、優秀精巧な労働手段の導入にもとづく生産力の増大、それを基礎においての労働日の短縮をマルクスもまた理想としたのである。人間の有用的諸労働もまた人間活動の一種であっても、悦楽のための活動とは異なる。「商品の物神崇拜性」を論ずる箇処において、ロビンソンは彼の生活欲望充足のために、道具を作ったり、家具をこしらえたり、魚貝をとったり、色々の種類の有用労働を為さなければならぬ、然し、「祈祷やこれに類することはここでは問題にしない、というわけは、わがロビンソンはそれに悦びを見出し、かかる活動を気晴らしと考えているからである」（青本文庫版・①・一七八頁）、と述べていることからその辺の事情を知りうるであろう。

『労働はさしあたり、人間と自然との間の一過程、すなわち、それにおいて人間が人間と自然との質料変換を彼自身の行為によって媒介し・規制し・統制する一過程である……』。彼は、この運動により彼の外部の自然に働きかけこれを変化させることにより、同時に彼自身の自然を変化させる」（同上・①・三二九―三〇頁）。労働は自然を変えると同時に自分自身を作りかえる。客体的にも主体的にも変革を行なうのが労働である。かかる見地に立つてこそ、物質代謝⇌生産過程を軸として人類史の全体を自然史的過程として把まえた歴史観が成立する。唯物史観は経済史観ではない。右のような人間観と労働観が基礎にあつての歴史観である。

労働によって人間は自然を変えると云つても得手勝手に変えるものではない。自然の法則に反することはでき

ない。成果において実現さるべき目的が労働の始めに表象されていなければならぬとしても、その目的は自然の法則を無視して成り立つものではない。労働主体としての人間は「自然的なものの形態変化のみを生ぜしめるのではない。彼は自然的なものうちに、同時に、彼の目的すなわち彼の知つてゐる・法則として彼の行動の仕方様式を規定する・それに彼が自分の意志を従属させねばならぬ・彼の目的—を実現するものである」（同上・三三〇頁）。かくて広い意味における人間の生活が自然の法則から免れえないかぎり「必然の王国」から脱れ出ることはできない。然しそれにもかかわらず、人間は科学・技術の力により、自然法則に服しつつこれを利用して自然の盲目的支配を克服して一步一步と「自由の王国」の建設へと向うであろう。その基底にこそ労働が存在する。

労働がこのように生活の根幹をなすものであるにもかかわらず、労働と生活とが対立し、生活のために労働があり、生活が労働から解放された場面にある如く、本末顛倒した事態が現存しているというのが資本主義の実相である。質的にも量的にも疎外されている労働の実相こそ高次な社会を志向する根拠である。資本主義のもとでは労働の自主性はない。目的の定立も、その目的に従つての労働過程の指揮統制も、一切が労働者の外にある。かくて精神労働（資本家・経営者）と肉体労働とが分裂し対立する。労働過程は内容的にはますます無味乾燥となり苦痛となる。生命活動であるべき労働が生存手段に転化している。労働が彼の生活を犠牲にするものとして現われている。かかる事態を打破して真実な人間を取りもどそうとするのが『資本論』を貫通している革命的理論である。「労働がたんに生活のための手段ではなく、労働そのものが生活の第一欲求となつたのち、個人の全面的な発展とともに、生産力も増大して、協同組合的富のあらゆる噴水があふれでるようになったのち——そのときはじめて、せまいブルジョアの権利の地平線は完全にふみこえられ、社会はその旗のうえにこうかくことができ

る。各人は能力におうじて、各人はその必要におうじて！」（『ドイツ労働者党綱領評註』・選集・第十二卷・二四三―四頁）。

資本主義の客観過程は資本の再生産過程であるが、この過程は価値としての資本の再生産過程であると共に内容・実体においては、資本制生産関係の再生産過程である。労働力の再生産は労働者の私的生活領域にぞくする事柄であるが如くに見えるが、その実体においては資本運動の一環を構成しているのである。労働力を商品として資本に販売し、資本によって消費され、再びそれを生産して資本の要求にこたえるように必然的に仕組まれている。これが資本主義の実相であって、労働の本性は歪められている。ここから、人間を解放し、労働があるべき姿に回復させんとする、労働者の主体的活動が生まれてくる。資本制生産様式の打破と新しい社会の建設を必然ならしめる。と同時に資本の再生産過程の発展、蓄積過程は、労働の社会化、生産力の増大をもたらして、新社会建設の物質的条件を生みだす。『資本論』・第三卷・第七篇・第四十八章の「三位一体的範式」において、エンゲルスが「ここから第四十八章が始まる」と脚註するところの・そして第一卷・第七篇・第二十四章の第七節「資本制蓄積の歴史的傾向」につづくとみられる文章が展開されている（青木文庫版・⑬一―一五三頁以下）。「資本制的生産過程は、社会的生産過程一般の歴史的に規定された一形態である。この社会的生産過程は、人間生活の物質的実存条件の生産過程であるのと同様に、独自のな・歴史的・経済的な・生産諸関係において行なわれるところの、この生産諸関係そのものを——したがってこの過程の担い手たちを、彼等の物質的実存諸条件および彼等の相互的諸関係を、すなわち彼等の規定された経済的諸形態を——生産し且つ再生産する一過程である。ただし、そのもとでこの生産の担い手たちが自然と結び相互に結ぶ——そのもとで彼等が生産する——これらの諸連

関の全体、この全体こそが、社会、その経済的構造からみた社会だからである。資本制的生産過程は、そのすぐ
 の先行生産過程と同じく、規定された物質的諸条件のもとで行なわれるのであるが、これらの条件は、同時に、
 個々人が彼等の生活再生産の過程において取り結ぶ規定された社会的諸関係の担い手である。かの諸条件ならば
 にこの諸関係は、資本制的生産過程の、一方では前提であり、他方では成果であり創造物である。……………さら
 に資本は——そして資本家なるものは人格化された資本に他ならず、生産過程では資本の担い手としてのみ機能
 する、——だから資本は、それに照応する社会的生産過程において一定分量の剰余労働を直接的生産者または労
 働者から汲み出すのであって、この剰余労働たるや、資本が等価なしに受けとるのであり、いかにそれが自由契
 約的合意の結果として現象しようとも、その本質からみれば依然として常に強制労働である……………。剰余労働
 一般は、与えられた欲望の程度をこえる労働としては、つねに残存せねばならぬ。資本主義制度においては、奴
 隸制度などにおけると同じく、剰余労働はただ敵対的な一形態をとるのであって、社会の一部分の純粋な無為従
 食によって補足される。一定分量の剰余労働は、災害にたいする保険のために必要であり、再生産過程の必然的
 な・欲望の発展および人口の増加に照応する・果進的拡張——これは資本制的立場から蓄積と名づけられる——
 のために必要である。資本がこの剰余労働をつぎのような様式および諸条件すなわち、従来の奴隸制、農奴制な
 どという諸形態のもとでもよりも、生産諸力・社会的諸関係の発展のため、および、より高度な新社会の諸要素
 の創造のために一そう有利な諸条件——のもとで強制するということは、資本の開化的側面の一つである。資本
 はかくして、一面では、社会の一部分によっての他部分を犠牲とする強制および社会的発展（その物質的および知
 的諸利益を含む）の独占化が見られなくなるような一段階を招来するのであるが、他面では、「この独占化は、よ

り高度な社会形態のもとではこの剰余労働を物質的労働一般にあてられる時間の一そう大きな制限と結びつけることを許すような、諸関係のための物質的手段および萌芽を創造する。けだし剰余労働は、労働の生産力の発展次第で、総労働日が小さくても大でありえ、また、総労働日が大きくても相対的に小でありうるからである。………どれだけの使用価値が一定の時間中したがってまた一定の剰余労働時間中に生産されるかは、労働の生産性に依存する。だから、社会の現実的富、および、社会の再生産過程のたえざる拡大の可能性は、剰余労働の長さに依存するのではなく、剰余労働の生産性におよび、そのもとで剰余労働が行なわれる生産諸条件の内容豊富さの大小、に依存する。自由の領域は、事実上、窮迫と外的合目的性によって規定される労働がなくなるところではじめて始まる。だからそれは、事態の本性上、本来的な物質的生産の部面の彼岸に横たわる。未開人は自分の欲望を充たすため、自分の生活を維持し再生産するために自然と戦わねばならぬように、文明人もかかる戦いをせねばならず、しかもどんな社会形態、ありうべきどんな生産様式のもとでも、かかる戦いをせねばならぬ。人間の発展につれて、欲望が拡大するが故に、この自然的必然の領域が拡大する。だが同時に、この欲望を充たす生産能力も拡大する。この領域内での自由は、ただ、社会化された人間・結合した生産者たちが、自然との彼等の質料変換により盲目的力によっての如く支配される代りに、この質料変換を合理的に規制し、彼等の共同的統制のもとに置くという点——最小の力を充用して、彼等の人間性に最もふさわしく最も適的な諸条件のもとで、この質量変換を行なうという点——にのみありうる。だが、これは依然として常に必然の領域である。必然の領域の彼岸において、自己目的として行なわれる人間の力の発展が、真に自由の領域が、——といっても、かの必然の領域を基礎としてのみ開化しうる自由の領域が、——はじまる。労働日の短縮は根本条件である」。

労働を欠く人間の生活は無意義であり、無内容である。然し労働はまた幾許かの肉体的労苦を伴なうことは否定されえない。然しその肉体的・精神的労苦が、外圧により強制されたものであるならば一段と酷しく感ぜられる。J・S・ミルは機械の使用がどれだけ人間の労苦を軽減したか疑わしいと述べたが、労働手段が必要労働を短縮させる手段として一般的に労苦を軽減させるためのものではなく、資本の利益に奉仕させるための、その限り労働をますます疎外させる手段であるからに他ならない。人類の志向するところは、客体的には労働の生産性を高めることによって肉体的労苦を軽減させることであり、主体的には労働を自発的たらしめることによって精神的労働と肉体的労働との合一によって、労働を自覚的な生活実体たらしめることである。そのためにこそ優秀な労働手段が必要とされる。だが、それをばばむものこそ、経済の体制そのものの中にある。「資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるすべての方法は個々の労働者を犠牲として行われるのであり、生産を發展させるすべての手段は生産者の支配に搾取手段に転変し、労働者を部分人間に不具化させ、彼を機械の附属物に格下げし、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、自立的機能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的機能を彼から疎外するのであり、それらの方法・手段は、彼の労働諸条件をねじ歪め、労働過程では極めて偏狭唾棄すべき専制支配に彼を服せしめ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れるのである。ところが、剰余価値生産のすべての方法は同時に蓄積の方法であり、蓄積のあらゆる拡大は逆に右の方法の發展の手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の給与がどうあろうとも高かろうと低かろうと——悪化せざるを得ないということになる」

資本主義社会の成立とともに労働主体の人格的隷属は解放されたものの、それに代って物的な依存関係が生まれた。人格の独立性は認められたものの、それは物的依存性を基礎にしたものであり、特に労働は資本に支配された労働として、質的にも量的にも、資本に縛られたものである。そこに労働の疎外、人間の非人間化がおこる。然しそれにもかかわらず、資本主義の発達は労働の生産力を高め、資本主義制度のもとで許されうる限度において、労働の量的側面における束縛からの解放を生み出す。資本主義が止揚され新しい社会の到来ともなれば、諸個人の労働は共同的・社会的力能となって全面的に発展し、はじめて自由な人格が認められるにいたり、労働の質的なおよび量的な束縛からの解放が生じ、いまや高度に発展した生産力のもとにおいて、豊富な生活資料のなかで、人間は文化の担当者としての使命にこたえるべく、生活と一体となった労働を真剣に行なうにいたるであらう。

三 体系と理論の発展

マルクス経済学体系はブルジョア的生産関係の生成・発展・没落の過程を究明したところの、そのかぎりブルジョア的生産関係を人間社会一般の自然的形態であるとみなして経済学的究明に終始した古典派経済学その他のブルジョア経済学の「批判の体系」である。一般にマルクス主義理論と呼ばれるものは、史的唯物論を骨髄にした経済学理論である。その点『資本論』は単なるブルジョア社会の経済分析の書ではなく、ブルジョア社会の变革のための理論書であり、革命的实践にたいしての指導理論を提供している書物である。レーニンは一八九九年に書いた『われわれの綱領』において、「われわれは完全にマルクスの理論の基盤に立っている。この理論こそ、

はじめて社会主義を空想から科学にかえ、この科学の確固たる原理をうち立て、また、この科学をさらに発展させて、すべての細目にわたって仕上げるにあたり、すすむべき道をあらましめしたものである。それは、労働者の雇用、労働力の購買が、どういふふうにひとにぎりの資本家たち、土地、工場、鉱山などの所有者たちによる幾百万の無産人民の奴隷化を隠蔽しているかを説明して、近代資本主義経済の本質をあらわにした。それは、近代資本主義の全発展が、どのように大規模生産による小規模生産の駆逐にむかつてすすんでいるか、社会主義的な社会制度を可能とし必要とする諸条件をつくりだしているかを、しめした。それは、根をおろした慣習や、政治的陰謀や、錯雑した法律や、たくみに編まれた学説のかげに、階級闘争を、あらゆる種類の有産階級と無産大衆との、すべての無産者の先頭に立つプロレタリアートの、闘争をみることを、おしえた。それは、革命的な社会主義の真実の任務を明らかにした。その任務とは、社会の改造計画を編みだすことでも、資本家やその取りまきどもに労働者の状態の改善を説くことでも、陰謀をたくらむことでもなく、プロレタリアートの階級闘争を組織し、そして、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会の組織とを終局目標とするこの闘争を指導することである」（邦訳・『全集』・第四卷・二二四―二五頁）、と述べていることから知りえられるであろう。マルクスは秀れた理論家であったとともに偉大なる革命家・実践家であった。『資本論』理論は、「厳格な、最高度の科学性（それは社会科学の最新の達成である）と革命性とを結合しており、しかも偶然的にはなく、たんにこの学説の創始者が学者の資質と革命家の資質とをその一身に結合していたからだけではなく、理論そのものうちに、内的に、かつ不可分にそれを結合していることにある。実際、ここでは理論の任務、科学の標目は、現実におこなわれている被抑圧階級の経済闘争において彼らを助けることに、はっきりとおかれている」（『レ---

『資本論』のもつ意義にして右に述べたようなものであるとすれば、『資本論』体系のなかで重要な部分は資本の生産過程、なにかんずく、剰余価値の生産であらう。「……第一篇は主要な章、すなわち資本にかんする第三章をまだ含んでいないことを君は知るだろう。僕はこれを政治的な理由から得策だと考えた、というのは、第三章からほんとうの戦闘がはじまるのだし、僕にははじめから驚かさないう方が得策だと思われたからだ……」（ラッサール宛一八五九年三月二八日付手紙）。初版の第三章は現行版第三篇の「絶対的剰余価値の生産」に相当する。資本制生産を特色づけるものは剰余価値の生産であり、労働力という概念を明確にして、剰余価値の源泉を科学的に解明したところにマルクス経済学の前進がある。第一巻では、剰余価値生産の分析が中心的地位にあることは周知の通りである。体系はその理論的基礎としての商品論・価値論からはじまって貨幣にいたり、自立した価値を貨幣において捉え、ついで「貨幣の資本への転化」を考察し、核心部分たる「剰余価値の生産」に入る、という形式をとっている。「剰余価値の生産」の究明はもっぱら第三、第四、第五、篇においてなされている。第六篇は右との関連においての労賃論、そして最後の第七篇は流通過程を捨象しそのかぎり抽象的次元においてではあるが、資本の蓄積過程の分析を行なっている。抽象的次元においてはではあるとは言え、歴史的事実を踏んまえて、かつ理論的に、資本主義生産様式の生成過程をも原蓄過程として考察し、資本制蓄積の発展するところ、資本主義は如何様の運命をたどるべきかを、史的唯物論の上に立って、みごとに理論づけ、革命理論たるの面目を躍如たらしめている。生産過程での側面で捉えられた資本主義は第二巻の流通過程との統一的考察によっていっそう具体化され、さらに第三巻の総過程の考察において、総体としての資本主義生産のひきおこすもろもろの

現象が究明されてより現実化される、のであるが、それにもかかわらず第一巻は資本主義についての一応の理論像を提供している、と考へたい。従つてマルクスの経済学体系は『資本論』全三巻によつて構成されていることは当然ではあるが、中心的な理論体系は第一巻にあるのであつて、ここに示された理論の發展線上に帝國主義論や國家独占資本主義論は位置すべきものである。もちろんこのことは、第一巻において分析された資本主義の基礎的な運動過程が、より具体的に複雑な運動形態をとつて進行することの認識には、第二巻、第三巻、での分析の必要なることを軽視しようとするものではないが、たとえば、R・ルクセンブルグの如く、第二巻の第三篇を基軸において資本制蓄積を論じたやり方には与ふすることはできない。

ところで、理論とは何か、そして理論と体系との關係は。理論とは法則的に捉えた客観實在の認識像であり、理論像であつて、その形態は、学的知識の体系として存在する。学的体系はその形式において、簡單・抽象より複雑・具体へという概念の論理的展開の構造で示される。だから体系は、内的連関を辿りつつ、客観的實在の本質に迫らんとする認識のための手段・方法である。理論の發展は、新しい現實に當面して、旧來の理論を基礎にしての本質的認識への前進であつても、それはそのまま体系の發展に通ずるものではない。商品、資本、剰余価値の生産、資本の循環および回転、という風に展開された『資本論』の体系の論理的展開の延長線上に、帝國主義論や國家独占資本主義論が位置することによつて理論の發展がある、というものではない。周知の如く、『資本論』は一八六〇年代の、独占段階以前の、イギリス資本主義を取り上げて構築した理論体系であつて、資本主義の内部構造を明らかにして——この構造の解明がいわゆる経済学的範疇の論理的展開として体系づけられている——その中を貫通する運動法則を捉えてつくりあげた理論像であり、その運動法則の展開過程において新

らたな段階の資本主義、さらにはその行きつく過程、を理論的に指示しているのである。開かれた体系の意味は、理論的に発展することを意味するのであって、論理的上向が「資本一般の理論」として完結していることとは何ら矛盾しない。『資本論』の篇別構成の形において論理的上向の形式にある経済学体系は、そのかぎりにおいて内的連関を辿って資本主義の本質に迫った理論体系、換言すれば資本主義の内的組織を諸概念の連関において描きだしたもので、であって、資本主義そのものの認識像を与えている点において一応完結している。然しながら、資本主義をその内部組織において概念的に把握した理論像は、同時にまた、資本主義の運動・移行の法則を明確にした限りにおいて、その理論像は現実の資本主義の発展とともに変化発展するものであるところに、完結した体系であるものが同時に開かれた体系たらざるを得ぬ理由がある。

社会生活の基礎は自然との物質代謝の過程であって、此の過程が、商品の論理と、それに基礎づけられての資本の論理と、によって展開されているところに、資本主義生産様式が成立する。経済学の究明はまさにこの世界に向けられる。私見によれば、もろもろの経済現象は右の二つの論理の交錯するところにあらわれ、そのなかを貫通する運動法則によって、資本主義は現実的に運動する。かかるものとして資本主義を捉えた理論体系は必然的に発展が期待される。

『経済学批判』・序言に依拠してマルクスの体系プランを窺えば、(1) 資本、(2) 土地所有、(3) 賃労働、(4) 国家、(5) 外国貿易、(6) 世界市場、となっており、はじめの三項目で、「近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的生活条件を研究する」、ということになっている。生産関係は階級関係であり、従って政治関係、それ故に上部構造たる国家を無視することはできず、また資本主義として成立したブルジョア経済社会は

国家を空洞化させつつもそのもとに綜括されていることは否みえないのであるとすれば、経済学的研究は純経済過程のみを問題にして足れりとするものではない。然し一義的には先ず以て、上部構造を捨象した経済的土台に分析究明のメスを入れるべきであつて、まさにそれが、(1)乃至(3)の項目に相当する。もちろん此の場合とて、現に『資本論』が取り上げている「労働日」のところにせよ、「機械および大工業」のところにせよ、国家を不問に付してはいないが、純経済学理論としてみれば一応、純経済過程に対応すると看做して支障なからう。それ故に体系プラン(4)以下に示されるように、国家、諸国家相互の経済交渉を考察して、少くとも一八六〇年代の時点におけるイギリス資本主義を見本として、資本主義の包括的な理論像をつくり上げることを志したのである。従つて、研究の時点が一八六〇年代でなく一八九〇年代であつたとせば、体系プランが如何様であつたか、ということが、同時に『資本論』と帝国主義論や国家独占資本主義論との関連を問うことにもなり、体系と理論の発展にも通ずることとなる。

一九六〇年代の資本主義は帝国主義段階の資本主義であり、国家独占資本主義段階のそれである。従つて研究の出発点はまさに帝国主義段階の資本主義である。マルクスの方法論にして妥当なものであるとせば、マルクスは此の現実に対面して、分析抽象化の研究過程を基礎にして抽象より具体へ、簡単から複雑への、科学の方法に従つて、先ず資本主義一般の理論像を画きだし、それをもとにして、帝国主義段階の資本主義の究明に迫つたであらう。従つて、資本主義一般の理論像を画くための彼の体系プランには本質的に変更が加えられなかつたと考へる。すなわち、(1)乃至(3)において、国家による綜括を捨象して純経済的に下部構造を解明し、ついで上部構造たる国家を究明して、下部構造との関係を、自由資本主義段階の時点において把え、ついで世界的関連において

諸資本主義国の相互関係・相互作用をみることによって、資本主義一般をより具体的に把握し、その中において、資本主義発展のもろもろの運動を貫く法則を樹立して、その資本主義解明の理論を打ち立てる。その上に立って、独占資本主義の発展を歴史的且つ理論的に追究して行つて、帝国主義理論として完成させたであろう。このことは、プランにおける、(6)のあとに(7)として帝国主義が位すというのではなく、(1)乃至(6)の過程において資本主義一般に関する、而かも資本主義が発展するものであるかぎり、理論もまた発展すべきものである、という性格をもつての理論が構築されるであろう。そして、かかる理論と現実の帝国主義段階への資本主義の歩みとが、相互制約し合つて、理論の発展をみるであろう。尤も、現行『資本論』は主としてプランの(1)乃至(3)を主要なものとしていて、(4)乃至(6)の項目については、部分的には触れていても、全面的に取扱われてはいない。而かもこれらの項目は、帝国主義段階においては重要な契機である。従つて、現在の時点における『資本論』は、これらの項目についての叙述は、一八六〇年代当時の構想とは異なっていたであろう。然しそのところにこそまさに、『資本論』の理論的継承・発展の關係における『帝国主義論』としての『資本論』ができたであろう。換言すれば、資本主義の歴史的運動の一般的解明——これが『資本論』の理論的内容である——を基礎において、資本主義の変革と新しい社会制度の確立の鍵を、具体的に分析したものとしての理論体系が展開されたであろう。ここに理論の発展をみるのである。

之を要するに私見の結びは次ぎの如くである。一八六〇年代の資本主義を対象として成立した『資本論』体系と一九六〇年の現代資本主義を対象として成立する「国家独占資本主義論」体系との關係——事實的には『資本論』とレーニンの『帝国主義論』との關係と言つてもよからう——はどうあるべきかということについて、後

者が前者の理論的發展・繼承であるという基本的見解に立っている。その点、或いは歴史主義の偏向に陥いつているという批難を受けるかも知れないが、マルクス体系プランの上向線上に後者を位置づけようとする論理主義に多く反撥を感じる。然し私の歴史主義はいわゆる論理—歴史説ではないつもりである。マルクス経済学理論によつて捉えられた資本主義一般の認識像なくして現代資本主義の辿ってきた過程なり、現実の相なり、は理解できないと考える。資本主義の本質を歴史的・理論的に究明してのみはじめて現代資本主義への必然性が明らかにされるのであり、またそのことによつてのみ現代資本主義の本質が解明されうるのであって、ここにこそ理論の繼承・發展がみられると考える。そしてそれはどこどこまでも理論的發展であつても、体系の論理的上向の展開ではない。